

表現活動指導法の授業アンケート調査結果 における考察（１）

～保育者養成の観点から～

村 木 薫
坂 内 寿 子

はじめに

新潟中央短期大学幼児教育科は昭和56年に開設され「学、業のためにあり、業、又、学でなければならない」とする加茂暁星学園の建学の精神に基づき、実学主義を背景に保育者を養成する短期大学として35年間の実績を重ねてきた。この間、保育・幼児教育の分野に多くの人材を輩出し、地域社会の要請に応えてきた。また、教育面において小規模校の優位性を活かしながら地域と密着した活動を展開してきた。

そうした中、本学では毎年、学校行事として「新潟中央短大ミュージカル」が行われ、日頃の学習成果を総合して「ミュージカル」「リズム体操」「ぬいぐるみショー」を共同制作している。また、その成果を公開し評価を仰ぐとともに、地域社会との関係を一層親密にすることを目標としている。昭和61年に第1回目の公演が行われ、今年は32回目を数えるまでとなった。

この取組みは、学生が主体となって制作し、地域の子どもとのコラボレーションで、舞台を作り上げている。毎年5月中旬に午前と午後の2回、2時間30分ほどのプログラムに構成し上演されている。

平成15年には、優れた教育実践を文部科学省が認定する、「特色ある大学教育支援プログラム」に採択されている。こうした公的評価とともに30年余りの長い期間にわたる実績から、毎年、1300人以上の来場者があり、地域社会から好評を得ている。

平成27年には加茂市と新潟市において、30周年の記念公演を大きな感動とともに無事に終えることができた。これを機に、授業担当者として保育者養成の観点から、この取組みを検証することにより、新たな歩みを始めたい。

I 研究目的

この取組みは、後にも述べるが本学幼児教育科教育課程において、専門教育科目の選択科目として位置づけている「表現活動指導法」の授業でミュージカルの制作が行われてい

る。

これまでの表現活動指導法の授業内容は保育者養成の観点からすると、ミュージカルの上演というイベント的なイメージが強く出ていたように思われる。地元の加茂文化会館を中心に新潟県内の一般市民を観客として上演を行ってきたことで、その回数を重ねていく毎に、運営面において学生と授業担当者のみならず、他の教職員も含めた全学態勢による大掛かりな支援体制が必要となった。

しかし、授業の主体である学生たちはこの大きな活動にどのように取り組み、何を学び、どのような学習成果を上げてきたのだろうか。教育活動の一環という視点から、もう一度この授業のあり方を検討するため、平成27年度（第30回）と28年度（第31回）の2回、アンケート調査を実施した。今回はそのうちの28項目について、実際に授業を受けた学生たちの反応や感想をまとめ、授業の組み立てを検討する材料としたい。

また、2回実施したアンケート調査結果は、実施した時期や学年の雰囲気には違いはあるものの、大きな傾向は2つの学年の集計からつかめると思われる。また、保育者養成機関でなぜこのような規模の大きいミュージカルの制作・上演を実施しているのかなどの意味を改めて探ることで、将来の保育者を育てるための教育方針が少しでも明確になることが今回のアンケート調査実施の趣旨である。

Ⅱ「表現活動指導法」の概要

1. カリキュラム改定の経緯と授業科目としての位置づけ

平成10年6月の「教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令」の公布、7月施行に伴い、「大学において教員養成の課程を置く場合の審査基準」等が改正されたことに基づき、幼稚園二種免許状関連科目を中心に新たに編成された本学幼児教育科カリキュラムは平成12年度入学生から適用されることとなった。

カリキュラムの改定に伴い、幼稚園二種免許取得のための選択必修科目であった「表現Ⅱ」「表現Ⅲ」「表現Ⅳ」を廃止し、「表現活動指導法」が新設された。これまで課外の学校行事として取り組んできたミュージカルの制作やサークル活動として受け継がれてきた子ども向けのパフォーマンス（子どもワールド）を「表現活動指導法」の授業内容に位置づけ、必修単位化するとともに保育士養成課程における専門教育科目の選択科目とした。

こうした改定は、文部省（当時）の「専門分野の学問的知識よりも、教え方や子どもとのふれあいを重視し、教職員としての学校教育活動の遂行に資する『教職に関する科目』を充実」させ、「教授法としては体験や演習を重視する」といった方針と本学幼児教育科がこれまで築き上げてきた教育の特色と独自性をさらに強調した結果である。

また、平成23年度入学生より「表現活動指導法」は授業内容に見合った履修単位の見直

しが図られ、学修単位は演習 2 単位から 3 単位に変更され、現在に至っている。

2. 授業構成

授業は演習課題 1 と 2 で構成されている。

演習課題 1 では、グループ単位で子どもの鑑賞教材としての視点から、素材（合唱、合奏、オペレッタ、ペープサート、紙芝居、手品、リズムダンス等）を選定し作品（事業名「子どもワールド」）を制作することにより、自らの表現について考える内容となっている。

演習課題 2 では履修者全員で一つのミュージカル作品を共同制作し、その脚本づくりやロール・プレイングを通じて幼児の心性に係る知識理解を深めると共に、洗練された表現技法の習熟を図り、保育者としての実践的指導力を高めようとするものである。

指導形態は専任教員 3 名と非常勤教員 2 名（音楽表現、造形表現、身体表現担当）が一斉授業とグループワークを併用して授業を展開する。完成した作品は地域社会に発表し評価を仰ぐことにしている。

3. 到達目標

先にも述べたが、平成12年度入学生から「表現活動指導法」の授業の中で、ミュージカル等の取組みが行われ現在に至っている。その間、学習成果の明確化が求められ、平成25年度から授業担当者は各科目に学生が獲得すべき知識、技能、態度等をシラバスの記述項目にある「到達目標」の中で記すこととなった。

到達目標を設定するにあたり、長年、授業のまとめとして履修者に課したレポートの自由記述内容を基に学習者側の視点から、4 項目を挙げ、到達目標とした。

- (1) グループ単位で子どものための鑑賞教材を選定し、制作することにより自らの表現について考える。（表現する場合や活動の進め方の留意点、グループ内での役割の遂行）
- (2) ミュージカルの役柄に応じた表現力を身につける。
- (3) 保育者に必要な表現力とその指導法を身につける。
- (4) ミュージカルの舞台練習や一人一役の係活動を通じて自主性、責任感、協調性、コミュニケーション能力、問題解決能力を身につける。

Ⅲ 「学習成果」の概要

本学では平成20年に文部科学省において示された「『教職実践演習（仮称）について』の到達目標に関する内容」を参考にして、平成24年に本学の必修科目として位置づけている「保育・教職実践演習」の学習成果を定めた。

それらは、文部科学省が例示した学生に求められる「必要な資質能力に関する『履修カルテ』」の評価項目と同様の内容であり、本学では、その評価項目を知識・技能・態度・実践という4つの区分に分け、知識が11項目、技能が5項目、態度が5項目、実践が6項目の合計27項目を具体的な学習成果として示している。今回のアンケート調査では、このうち技能5項目、態度5項目についても保育者養成の観点から問いかけている。

Ⅳ 調査の概要

(1) 調査日

平成27年12月22日及び平成28年5月27日

(2) 調査対象

調査対象は、平成27年5月に実施された第30回新潟中央短期大学ミュージカル「私の大切なもの～マツユキ草の奇跡～」を記念公演として加茂文化会館と新潟テルサで2回公演を行った学年(80人)と平成28年5月に実施された第31回新潟中央短期大学ミュージカル「白雪姫～想いよ届け黄金のリンゴ～」を加茂文化会館で上演した学年(80人)の総計160人である。

(3) 回答者数

147人(回収率91.8%)

平成27年度：第30回 ミュージカル 68人(85.0%)

平成28年度：第31回 ミュージカル 79人(98.7%)

(4) 調査方法

評定尺度法を用いた質問紙調査及び自由記述

評価段階

- | | | |
|-------------|-----------|-------------|
| ⑥ 非常に当てはまる | ⑤ 当てはまる | ④ やや当てはまる |
| ③ やや当てはまらない | ② 当てはまらない | ① 全く当てはまらない |

(5) 調査内容(項目)

- ① 表現活動指導法のシラバスに記載されている到達目標から質問項目を考えた。特にミュージカル練習や係活動を通じて、自主性、責任感、協調性、コミュニケーション能力、問題解決能力に関する質問に重点を置いた18項目となっている。

1～7：コミュニケーション能力、協調性、問題解決能力

8～11：自主性、責任感

12～18：表現技能

- ② 保育・教職実践演習で定めた保育者として必要な資質能力の到達目標から「知識・技能・態度・実践」の4区分のうち、特に技能・態度にかかわる内容をミュージカル制作及び上演に至るまでの過程でどのようにこれらの学習を行い、学習成果としてどのような効果があったのかを問いかけた10項目となっている。

19～23：態度

24～28：技能

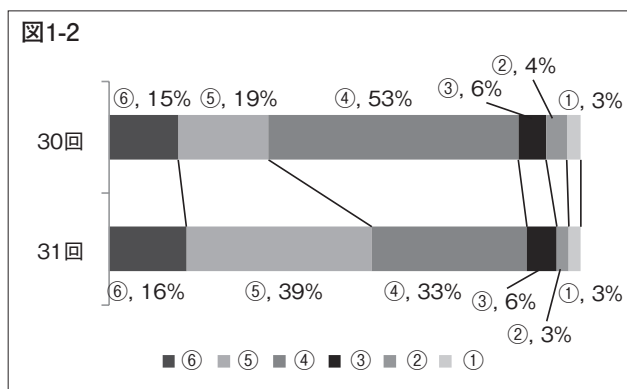
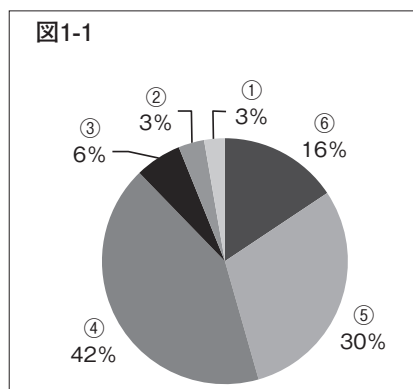
- ③ 自由記述

- ・ミュージカルの制作を通して一番学んだこと
- ・ミュージカルの制作を通して保育に活かされるもの（こと）

調査結果

本調査は⑥ 非常に当てはまる、⑤ 当てはまる、④ やや当てはまる、③ やや当てはまらない、② 当てはまらない、① 全く当てはまらない、の評価項目を提示し回答を求め、2回の調査の総計を円グラフに、第30回と第31回のそれぞれの結果を棒グラフに表した。

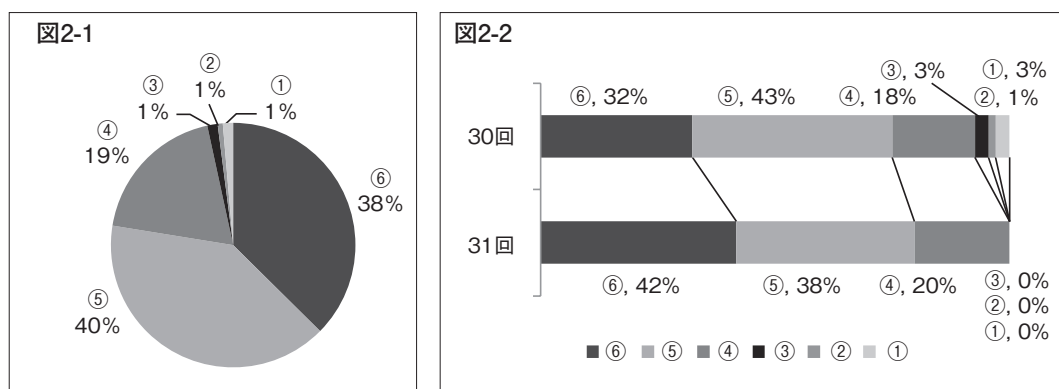
1 制作の過程で自分の意見・アイデアなどを伝えた(総監や同じグループ、教員などへ)



1の「制作の過程で自分の意見・アイデアなどを伝えた」という設問に対し、⑥非常に当てはまる（16%）、⑤当てはまる（30%）、④やや当てはまる（42%）と回答があり全体に占める割合は88%であった〔図1-1〕。この結果から、キャストや係の一員として、何らかの場面で、自分の考えを制作に反映させるための手立てとして、言語的なコミュニ

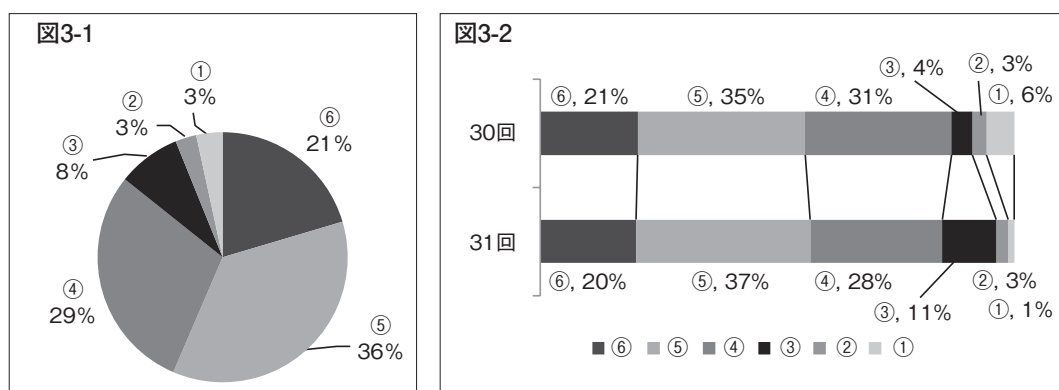
ケーションを用いて自己表現をしていることがわかる。また、図1-2より、⑤と④の全体に占める数値に違いが見られる。これは31回の演目がこれまでに上演したことの無いものであったため、制作する上で、積極的に意見やアイデアを伝える必要性があったのではないかと考えられる。

2 話し合う中で他の人の意見（反論も含めて）を理解しようと努めた



2の「話し合う中で他の人の意見（反論も含めて）を理解しようと努めた」という設問に対し、⑥非常に当てはまる（38%）、⑤当てはまる（40%）、④やや当てはまる（19%）と回答があり、全体に占める割合は97%であった〔図2-1〕。また、31回は肯定的な回答が100%と全体を占めている〔図2-2〕。この結果から、コミュニケーションを通じて、他者の意見（伝えたいこと）を理解しようとする意識の高さがうかがえる。

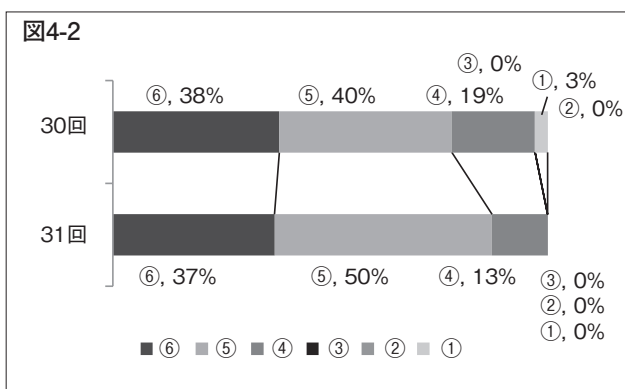
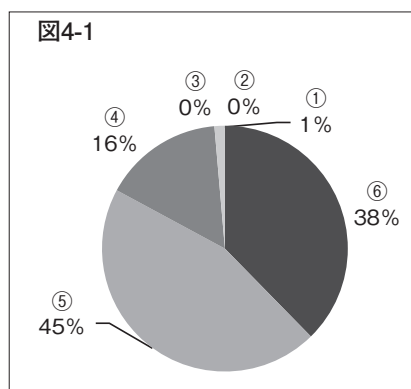
3 意見を交わして議論を行った



3の「意見を交わして議論を行った」という設問に対し、⑥非常に当てはまる（21%）、⑤当てはまる（36%）、④やや当てはまる（29%）と回答があり、全体に占める割合は86%であった〔図3-1〕。制作過程において、集団の中で他者が伝えたいことを聴き、受け

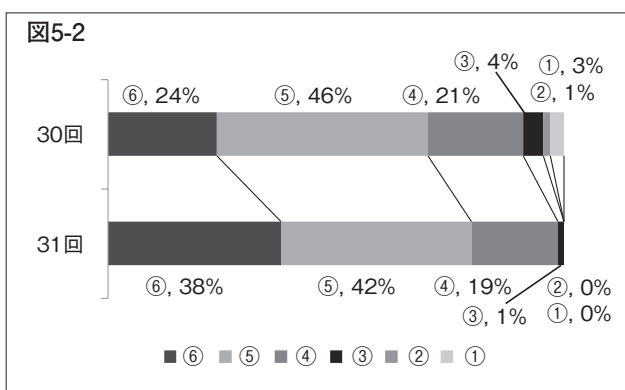
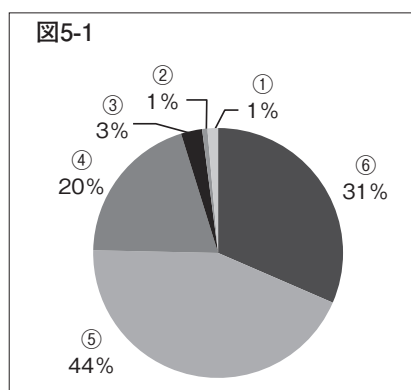
止め、それに対して自分の考えを伝えるといった意見の交し合い、やり取りが行われ、一つの方向性を導き出していると推察される。積極的、肯定的な回答が86%と、他の回答が90%台に推移しているのに対してやや低い値となっている。これは議論する場面がキャストや係のリーダーのように、その役割によって限られた者になっているのではないかと考えられる。

4 議論した結果について受け入れ、行動した



4の「議論した結果について受け入れ、行動した」の設問に対し⑥非常に当てはまる(38%)、⑤当てはまる(45%)、④やや当てはまる(16%)と回答があり、全体に占める割合は99%であった〔図4-1〕。この結果からほとんどすべての学生が、意見の交わし合いの結果から導き出された方向性を受け入れ、制作が進められたことがわかる。これは集団でミュージカルを制作するといった大きな目的を達成するためには欠かせない営みであると考えられる。

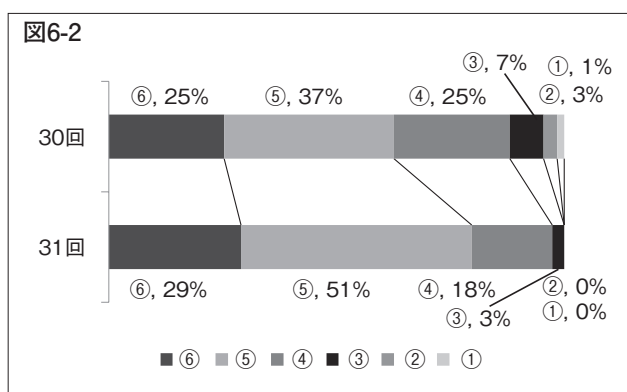
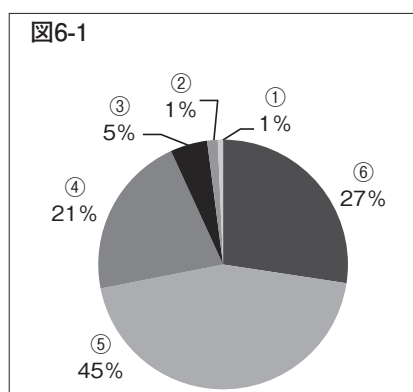
5 練習や係活動を通じて協調性を身につけることができた



5の「練習や係活動を通じて協調性を身につけることができた」という設問に対し⑥非

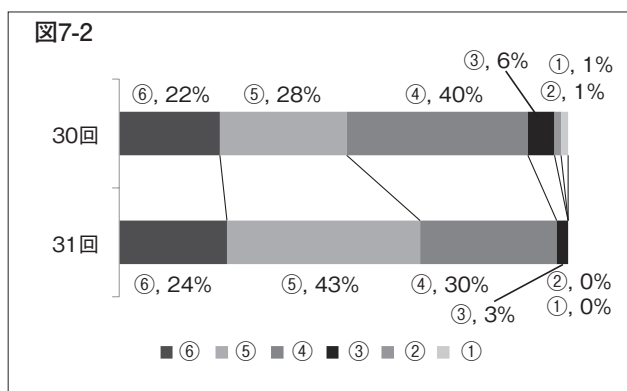
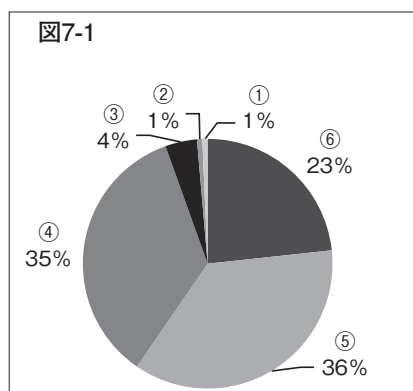
常に当てはまる (31%)、⑤当てはまる (44%)、④やや当てはまる (20%) との回答があり、全体に占める割合は95%であった[図5-1]。この結果から、学生一人一人が集団の中で、互いに助け合ったり譲り合ったりしながらミュージカルの完成に向けて、それぞれの役割を遂行することで協調性が身についたと実感できたのではないだろうか。また、図5-2より31回は肯定的な回答が99%を占めている。30回の記念公演に向けて2年生の取り組みを1年生の立場から見てきたことで、団結して物事を成し遂げる大切さを学び、協調性を意識した取り組みが行われた結果であるとみている。

6 練習や係活動を通じてコミュニケーション能力を身につけることができた



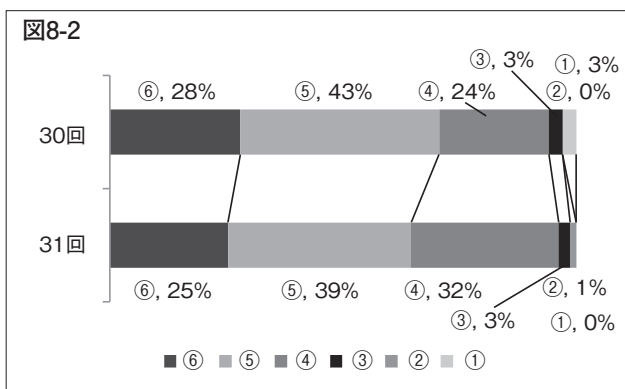
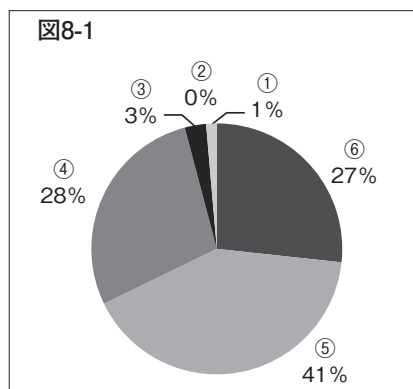
6の「練習や係活動を通じてコミュニケーション能力を身につけることができた」という設問に対し⑥非常に当てはまる (27%)、⑤当てはまる (45%)、④やや当てはまる (21%) と回答があり、全体に占める割合は93%であった [図6-1]。この結果から他者との意思疎通や協調性、自己表現の能力をほとんどの学生は肯定的な実感として捉えていることがわかる。

7 練習や係活動を通じて問題解決能力を身につけることができた



7の「練習や係活動を通じて問題解決能力を身につけることができた」の設問に対し⑥非常に当てはまる(23%)、⑤当てはまる(36%)、④やや当てはまる(35%)との回答があり、全体に占める割合は94%であった[図7-1]。この結果から制作過程において、多くの問題に直面し、そのための解決に向けた方策を模索し、問題を解決するための手立てを経験的に学んだことがわかる。

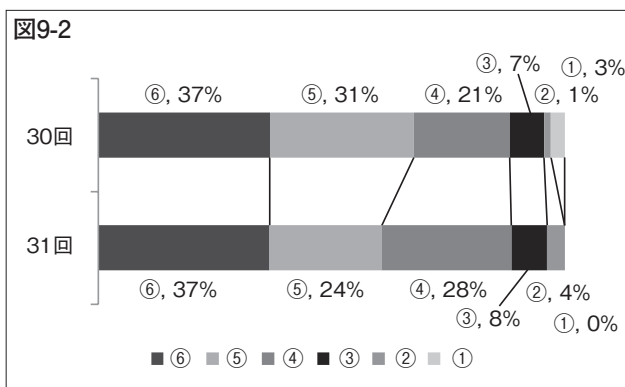
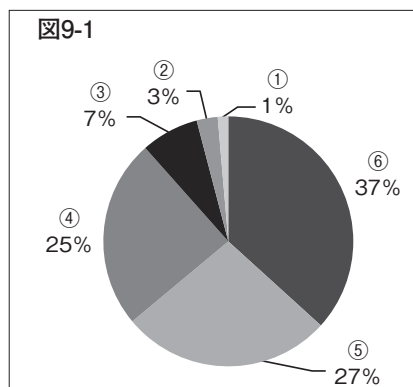
8 与えられた授業時間を意識して積極的に制作活動に取り組んだ



8の「与えられた授業時間を意識して積極的に制作活動に取り組んだ」の設問に対し⑥非常に当てはまる(27%)、⑤当てはまる(41%)、④やや当てはまる(28%)との回答があり、全体に占める割合は96%であった[図8-1]。

この結果から、予め、学生に提示している表現活動指導法の授業時間の枠の中では、積極的な制作活動が行われていたことがわかる。

9 授業時間以外での自主的活動を積極的に行った

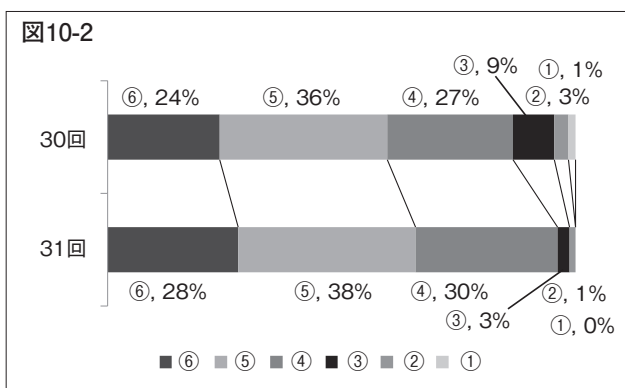
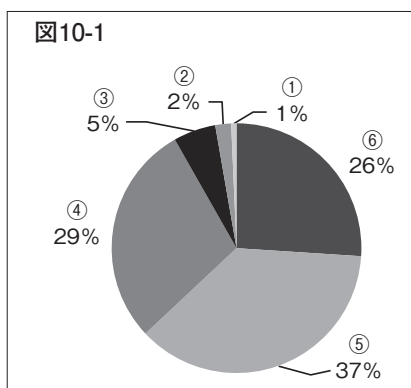


9の「授業時間以外での自主的活動を積極的に行った」の設問に対し⑥非常に当てはまる(37%)、⑤当てはまる(27%)、④やや当てはまる(25%)との回答があり、全体に占

める割合は89%であった [9-1]。

この結果から、学生は様々な制約のある中、自主的活動を積極的に行っていたことがわかる。

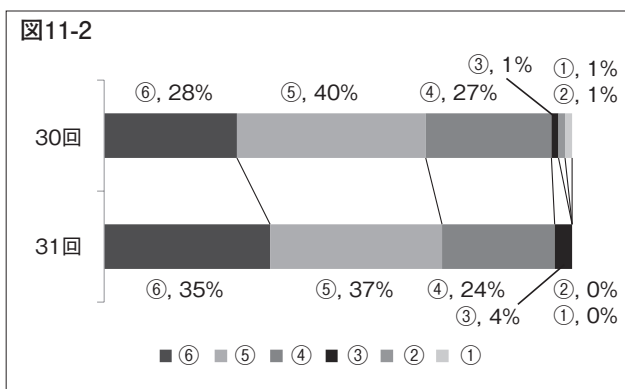
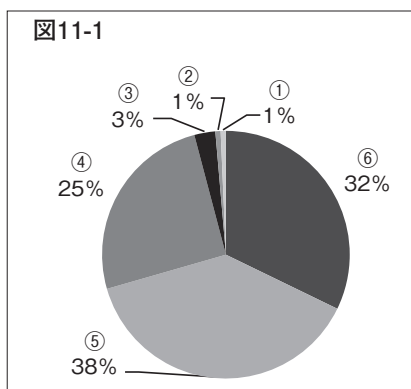
10 練習や係活動を通じて自主性を身につけることができた



10の「練習や係活動を通じて自主性を身につけることができた」の設問に対し、⑥非常に当てはまる（21%）、⑤当てはまる（37%）、④やや当てはまる（29%）と回答があり、全体に占める割合は87%であった [図10-1]。

この結果から、やるべき課題に対し、他者から指示される前に率先して自ら動くといった自主性について、多くの学生は肯定的に受け止めていることがわかる。

11 練習や係活動を通じて責任感を身につけることができた



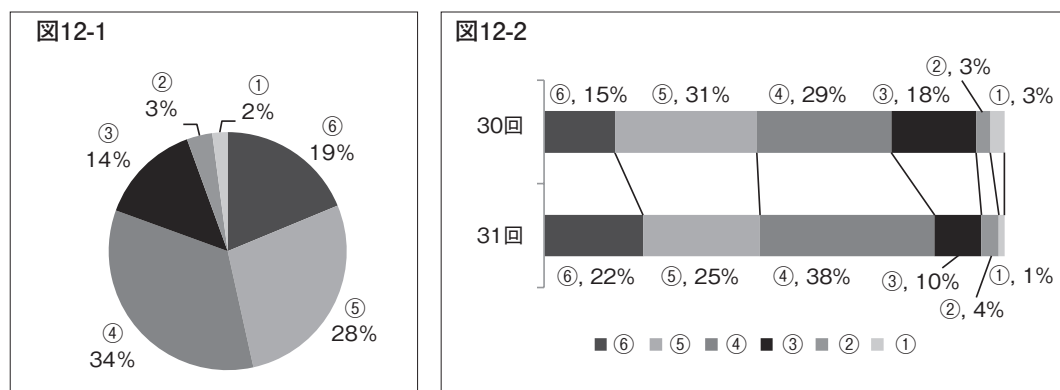
11の「練習や係活動を通じて責任感を身につけることができた」という設問に対し⑥非常に当てはまる（32%）、⑤当てはまる（38%）、④やや当てはまる（25%）との回答があり、全体に占める割合は95%であった [図11-1]。

ミュージカルの制作は学生が主体的に動くことを核（基本）としている。第31回の制作・

上演を終えて、そうした基本がようやく定着しつつあると思われる。教員は総監督や係のチーフの補佐役に徹し、制作を見守る態勢を取っている。一般学生は総監督や係のチーフの意向を汲み取り、試行錯誤しながら、それぞれの持ち場で互いに協力して、制作がおこなわれている。こうした主体的な行動が、責任感を自ずと育てることになり、肯定的な実感につながったものとみている。

以上の結果から学生一人一人が集団の中で、互いに意見を交わし合い、助け合ったり、譲り合ったりしながら、ミュージカルの完成、上演に向けて、それぞれの役割を遂行していく中で、学生はコミュニケーション能力（自己表現力、他者との意思疎通）、協調性や問題解決能力、自主性、責任感を身につけたと肯定的に実感できたのではないだろうか。

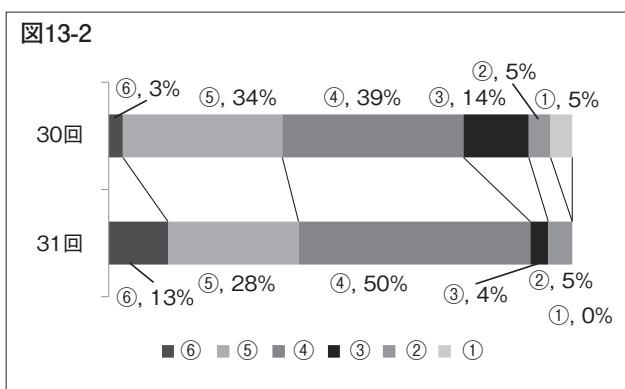
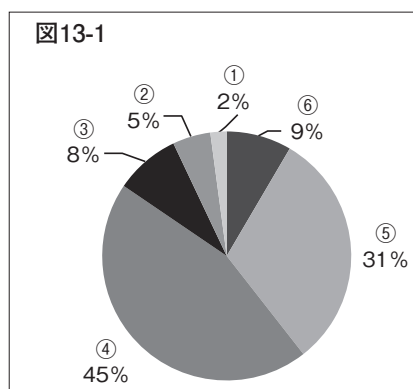
12 演じる中で自分の特技（得意分野）を活かすことができた



12の「演じる中で自分の特技（得意分野）を活かすことができた」という設問に対し⑥非常に当てはまる（19%）、⑤当てはまる（28%）、④やや当てはまる（34%）と回答があり、全体に占める割合は81%であった〔図12-1〕。

この結果から、肯定的な回答を81%も得られたことは、個々の授業科目では見えにくい学生一人一人の潜在的表現能力がミュージカルによって引き出された結果の数値ではないだろうか。

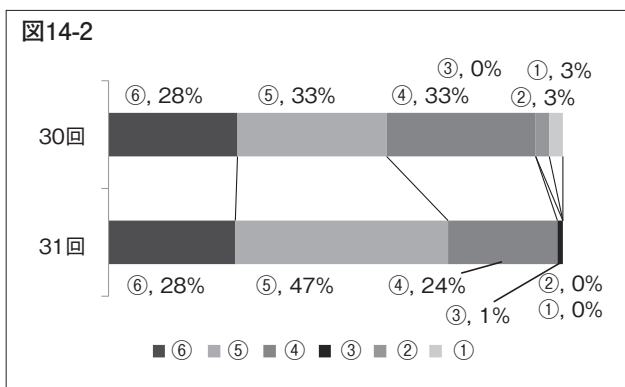
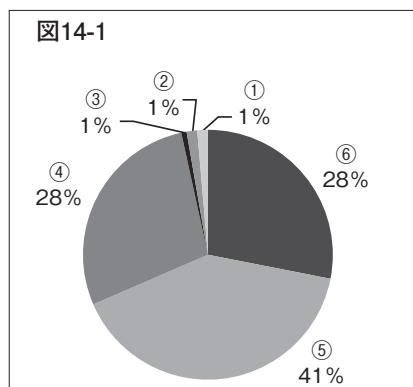
13 演じる中で自分の苦手（不得意分野）な部分が克服できた



13の「演じる中で自分の苦手（不得意分野）な部分が克服できた」という設問に対し⑥非常に当てはまる（9%）、⑤当てはまる（31%）、④やや当てはまる（45%）と回答があり、全体に占める割合は85%であった〔図13-1〕。

役柄を演じる中で85%も苦手意識が克服できたと肯定的な実感をもったことは、自主的、主体的な取り組みだからこそ、得られた結果であるとみている。

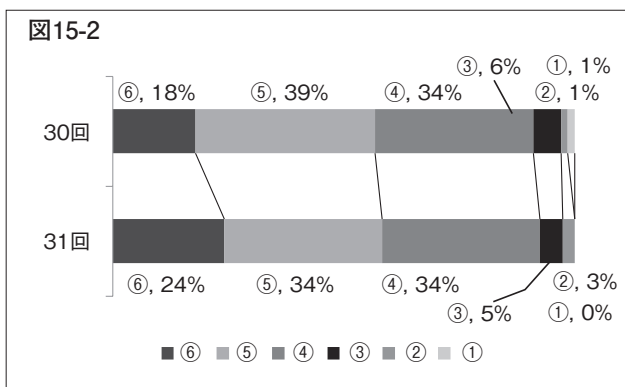
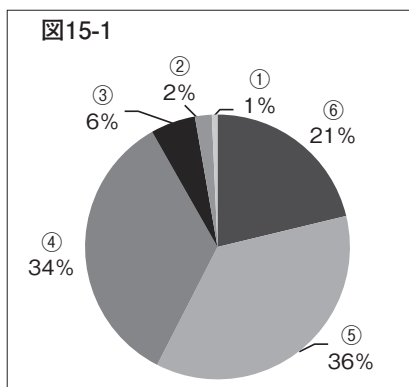
14 役柄に応じた表現を身につけることができた



14の「役柄に応じた表現を身につけることができた」という設問に対し⑥非常に当てはまる（28%）、⑤当てはまる（41%）、④やや当てはまる（28%）と回答があり、全体に占める割合は97%であった〔図14-1〕。

総監督は各キャストの性格や動きを台本作りの段階で、簡潔にまとめ、演技手がイメージしやすいように配慮している。それをもとに、役柄ごとに話し合いが行われイメージの共有を図り、動作、セリフ回し、歌唱、ダンス等を試行錯誤しながら創作（見出）した結果であるとみている。

15 保育者に必要な表現活動の指導法を身につけることができた

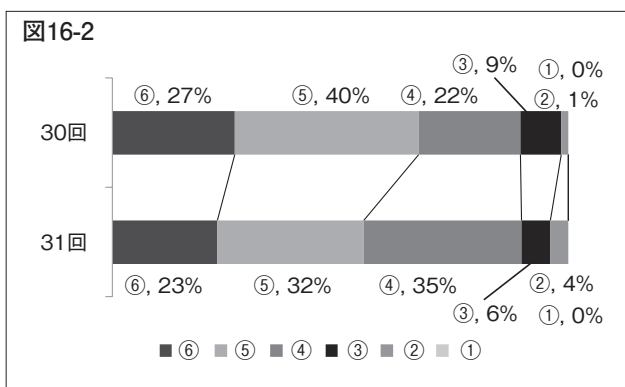
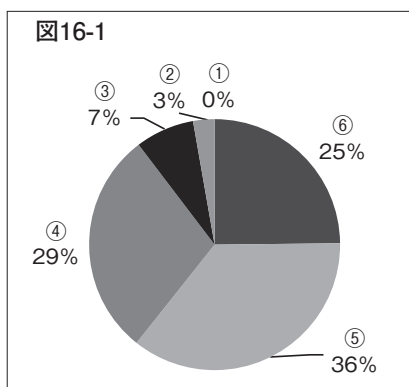


15の「保育者に必要な表現活動の指導法を身につけることができた」という設問に対し⑥非常に当てはまる（21%）、⑤当てはまる（36%）、④やや当てはまる（34%）と回答があり、全体に占める割合は91%であった〔図15-1〕。

制作過程において、他者と関わりながら歌う、踊る、物を作ることの体験を通して、表現技能の習得が図られ、そのプロセスから指導の方法や留意点を見出すことができたと考えられる。

また、地域の子どもとのコラボレーションによるミュージカルの制作は、直接子どもの様子を観察し、ダンスや歌を如何に分かり易く、楽しく、集中して練習できるかを思考しながら計画的に取り組まなければならない。こうした経験により、学生は身につけたといった実感を持ったのだと推察される。

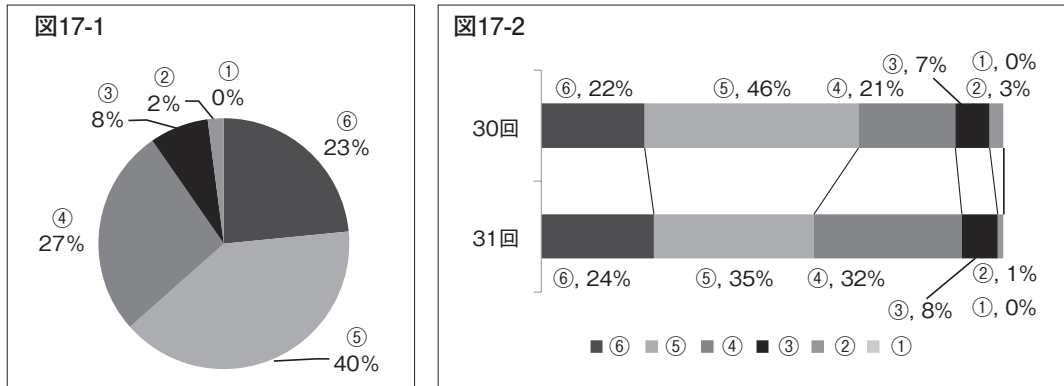
16 保育者となったときに子どもの前で抵抗感なく音楽的表現（歌う等）に自信がついた



16の「保育者となったときに子どもの前で抵抗感なく音楽的表現（歌うなど）に自信がついた」という設問に対し⑥非常に当てはまる（25%）、⑤当てはまる（36%）、④やや当てはまる（29%）と回答があり、全体に占める割合は90%であった〔図16-1〕。

大きな舞台を経験し、観客の反応を肌で感じるにより、一人一人の学生に達成感と共に、表現することの抵抗感がなくなり、自信につながったものと推察する。

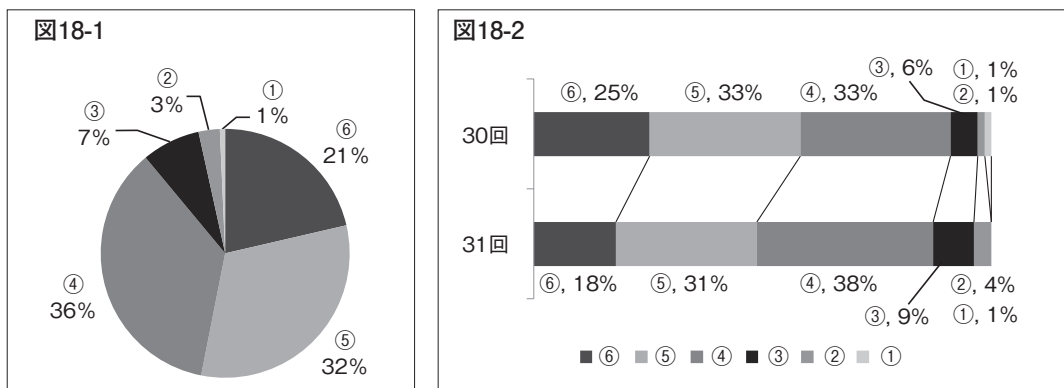
17 保育者となったときに子どもの前で抵抗感なく身体的表現（ダンス・感情表現等）に自信がついた



17の「保育者となったときに子どもの前で抵抗感なく身体的表現（ダンス・感情表現など）に自信がついた」という設問に対し⑥非常に当てはまる（23%）、⑤当てはまる（40%）、④やや当てはまる（27%）と回答があり、全体に占める割合は90%であった [図17-1]。

制作過程において、身体的表現にあたるダンスや演出は、キャスト別に意見を出し合い、無から創り上げたものである。それらを大きな舞台で表現することにより、観客の反応が、一人一人の学生に達成感と共に表現することへの抵抗感をなくし、自信につながったものと推察する。

18 保育者となったときに子どもの前で抵抗感なく造形的表現（描く・作る等）に自信がついた

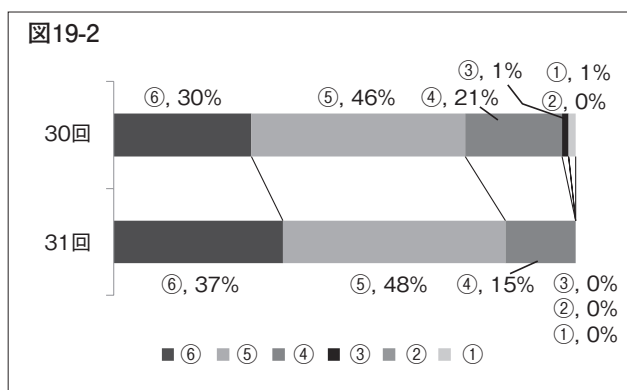
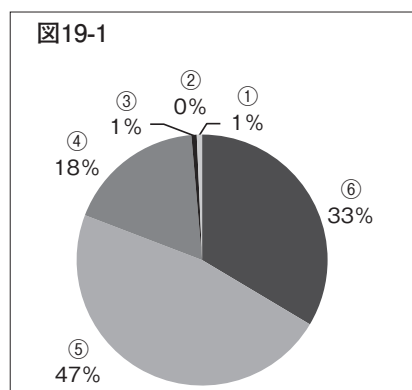


18の「「保育者となったときに子どもの前で抵抗感なく造形的表現（描く、作るなど）をする自信がついた」という設問に対し⑥非常に当てはまる（21%）、⑤当てはまる（32%）、④やや当てはまる（36%）と回答があり、全体に占める割合は89%であった〔図18-1〕。

ミュージカル制作上の造形的表現は、各キャストによる衣装やメイク作りがそれに当たる。また舞台美術において大道具・小道具の制作、広報活動において、ポスター・リーフレット・当日パンフレット、メイク係による各キャストのメイクイメージ画作りなど小物から大掛かりな制作ものまで、個人的にも集団的にも表現する機会が与えられている。こうした経験が自信につながったものとみている。

以上の結果から役柄を演じる練習過程において、多くの学生が特技（得意分野）を活かすことができたとする一方、苦手（不得意分野）とする部分も克服できたと肯定的な実感を得ている。また、ほとんどすべての学生が、役柄に応じた表現を身につけたとしている。こうした結果から学生の表現技能の獲得がみられたのではないだろうか。また、保育者として表現活動を指導する上で表現することへの自信が重要になってくる。地域の子どものコラボレーション、大きな舞台での経験が、表現することへの自信につながり、さらに指導の仕方についても経験的に学ぶことができたのではないかとみている。

19 他者の意見やアドバイスに耳を傾け、理解や協力を得て課題に取り組むことができるようになった

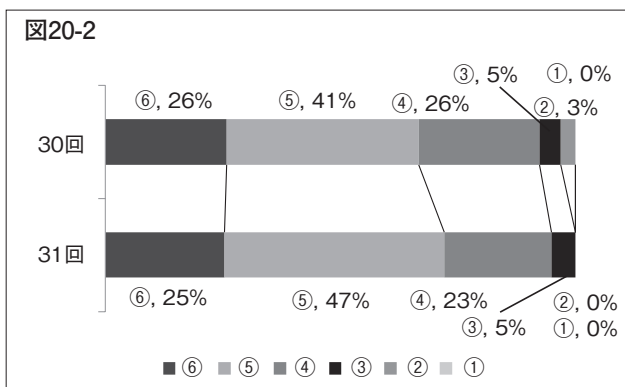
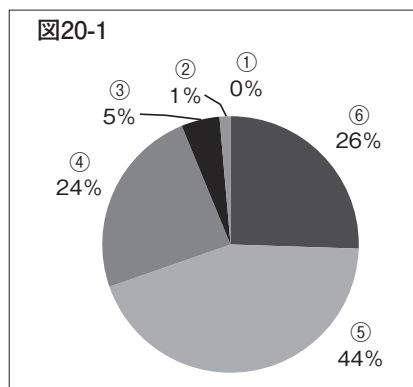


19の「他者の意見やアドバイスに耳を傾け、理解や協力を得て課題に取り組むことができるようになった」という設問に、⑥非常に当てはまる（33%）、⑤当てはまる（47%）、④やや当てはまる（18%）と回答があり、全体に占める割合は98%であった〔図19-1〕。

この結果からほとんどすべての学生が制作の過程や上演に向けて、自らの課題に対して他者の意見やアドバイスに耳を傾け、様々なやり取りを経験して、ミュージカルに取り組んだことがうかがえる。また、30回より31回の学生の数値が若干高くなっている背景とし

て、総監督や各キャストのリーダーなどの指導力や人間性などの違いが影響しているのではないかと考えられる。

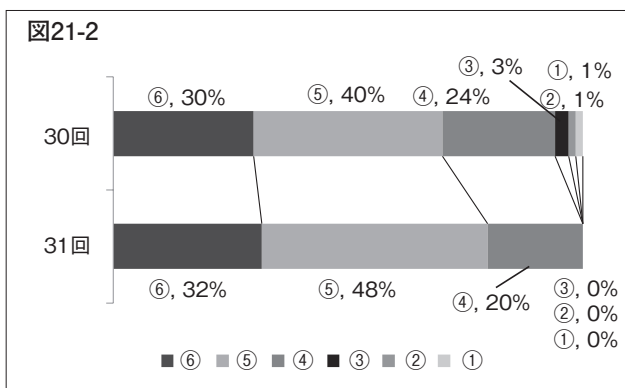
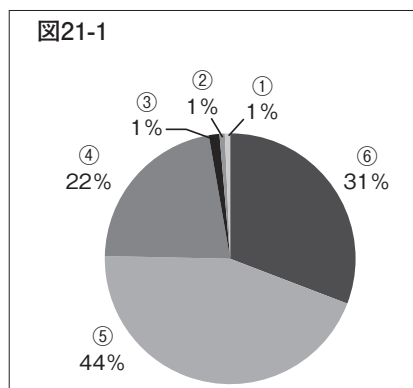
20 他者と共同して活動を企画・運営・展開することができるようになった



20の「他者と共同して活動を企画・運営・展開することができるようになった」という設問に、⑥非常に当てはまる（26%）、⑤当てはまる（44%）、④やや当てはまる（24%）と回答があり、全体に占める割合は94%であった〔図20-1〕。

この結果から多くの学生が制作の過程や上演に向けて、自らの課題に対して他者と共同して、ミュージカルという活動を企画・運営・展開する経験を通して、これらの能力を身につけたという実感を持ったことがうかがえる。

21 集団において、他者と協力して課題に取り組むことができるようになった

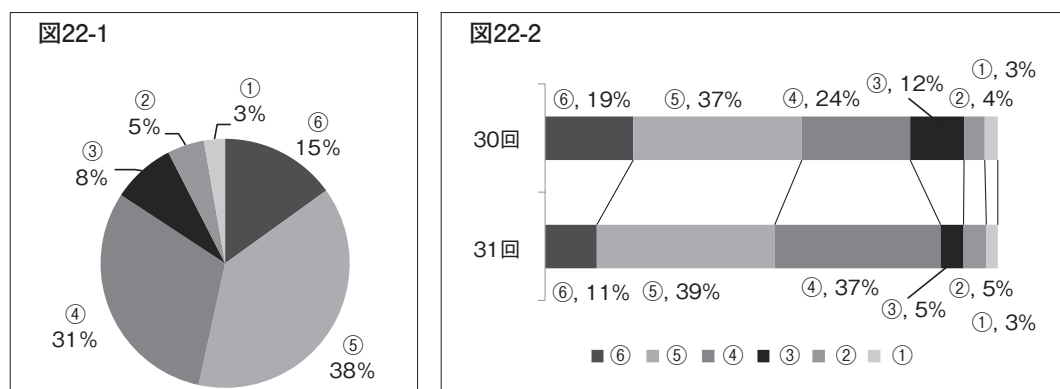


21の「集団において、他者と協力して課題に取り組むことができるようになった」という設問に、⑥非常に当てはまる（31%）、⑤当てはまる（44%）、④やや当てはまる（22%）と回答があり、全体に占める割合は97%であった〔図21-1〕。

この結果から多くの学生が制作の過程や上演に向けて、集団の中で他者と協力して課題

に取り組む経験を通して、何らかの達成感を感じたのではないかと想像できる。また、31回のミュージカルの制作・上演を経験した学生のほうが、他者と協力して課題に取り組んだ経験が深まっている結果となっている[図21-2]。その背景として、総監督や各キャストのリーダーなどの指導力や人間性などの違いなども影響しているのではないかと考えられる。

22 子どもたちの発達段階を考慮して、適切に接することができるようになった

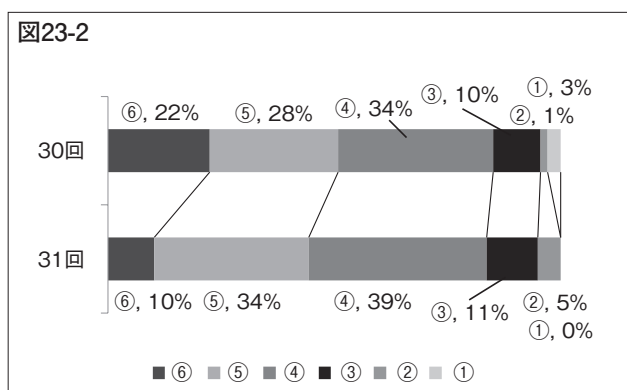
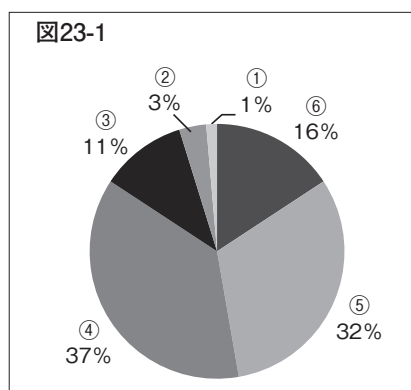


22の「子どもたちの発達段階を考慮して、適切に接することができるようになった」という設問に、⑥非常に当てはまる（15%）、⑤当てはまる（38%）、④やや当てはまる（31%）と回答があり全体に占める割合は84%であった[図22-1]。

この結果は、他のアンケート項目の結果と比べて、肯定的に捉えている学生の割合（84%）が少ないように感じるが、3歳から12歳までの地域の子どもたちと直接関わって、歌や踊りの指導を行う「子ども係」は10数名である。この学生数からすると、84%という数字はそれに比してかなり多いように感じた。おそらく、子ども係以外の学生たちも地域の子どもたちと舞台を作っていく上において、子どもたちが歌ったり踊ったりする姿に接することになり、間接的にも観察しながら彼らの様子を見ていたことによる結果ではないだろうか。

また30回実施の学生の方が、非常に当てはまると回答している割合が多い背景には、新潟公演と加茂公演の2回の子どもたちとの練習や接触があったことで、否が応でも子どもの発達段階に考慮した指導を行う機会が増えたことが理由ではないかと推察できる。

23 手遊び歌や的確な話し方など活動を行う上での基本的な表現の技術を身につけることができた



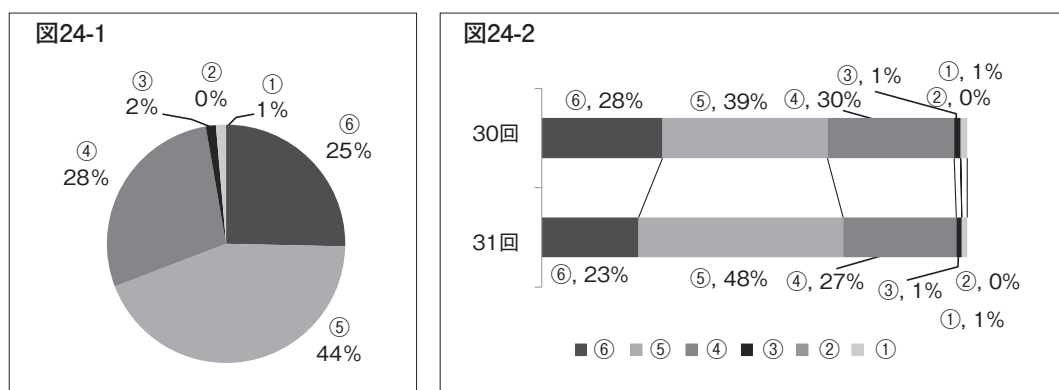
23の「手遊び歌や的確な話し方など活動を行う上での基本的な表現の技術を身につけている。」という設問に、⑥非常に当てはまる（16%）、⑤当てはまる（32%）、④やや当てはまる（37%）と回答があり全体に占める割合は85%であった〔図23-1〕。

この結果は、他のアンケート項目に比べて、肯定的に捉えている学生が少なくように感じるが、これも19のアンケートと同様に、地域の子どもたちと直接関わる子ども係は10数名であり、逆に85%という結果はそれに比して多いように感じた。おそらく他の多くの学生も子どもたちと舞台を作っていく上において、子どもたちが歌ったり踊ったりする姿を見ることになり、間接的にも関わることによる結果ではないだろうか。

また30回実施の学生の方が、「非常に当てはまる」と回答している割合が多い背景には、新潟公演と加茂公演の2回の子どもたちとの練習や接触があったことで、否が応でも学生自身の子どもたちへの指導する機会が増えたことが原因ではないかと推察できる。その関わりの中で模索しながら、子ども達とコミュニケーションを図った結果ではないだろうか。

以上の結果から、ほとんどすべての学生が制作の過程や上演に向けて、課題に対して他者の意見やアドバイスに耳を傾け、様々な関わりを経験し、他者と共同して、ミュージカルという活動を企画・運営・展開した様子が見えてくる。また、地域の子どもたちと舞台を作っていく上において、学生は子どもたちが歌ったり踊ったりする姿に直接接したり、観察したりすることにより、発達段階を考慮した接し方や的確な話し方など技能的な面を身につけたのではないかと考えられる。

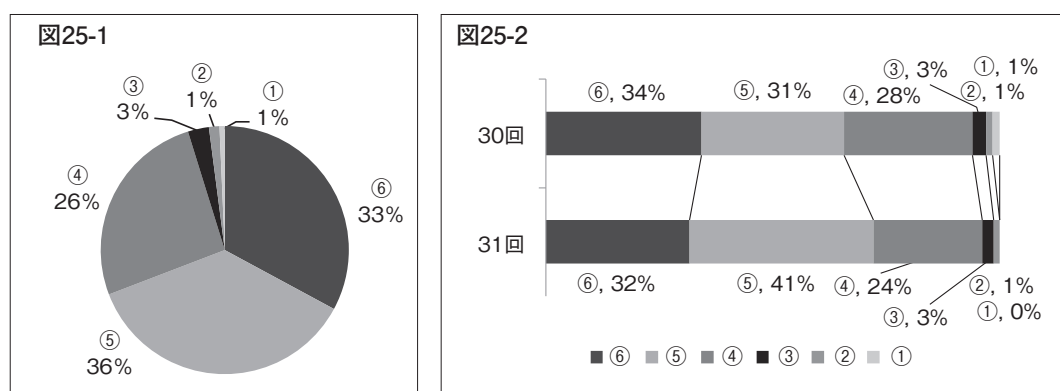
24 集団において、率先して自らの役割を見つけたり、与えられた役割をきちんとこなすことができるようになった



24の「集団において、率先して自らの役割を見つけたり、与えられた役割をきちんとこなすことができる。」という設問に、⑥非常に当てはまる（25%）、⑤当てはまる（44%）、④やや当てはまる（28%）と回答があり、全体に占める割合は97%であった〔図24-1〕。

また、図24-2より、30回、31回ともに同じ傾向が見られることから、多くの学生たちはミュージカル制作および上演にいたるまでの過程において、自分なりの役割を自覚し、自主的になんらかの役割をこなす経験や達成感を体験したことが推察できる。

25 気軽に子どもと挨拶をしたり、話を聴いたりするなど、親しみを持った態度で接することができるようになった

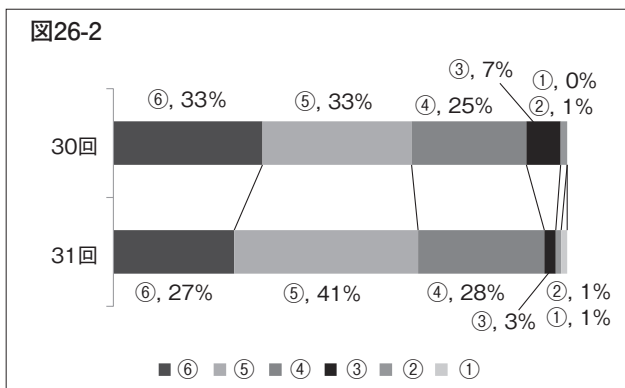
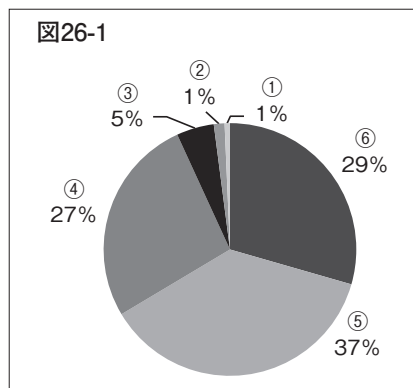


25の「気軽に子どもと挨拶をしたり、話を聴いたりするなど、親しみを持った態度で接することができる。」という設問に、⑥非常に当てはまる（33%）、⑤当てはまる（36%）、④やや当てはまる（26%）と回答があり、全体に占める割合は95%であった〔図25-1〕。

また、図25-2より、30回、31回ともにほぼ同じ傾向が見られることから、多くの学生たちはミュージカル制作および上演にいたるまでの過程において、子ども係に限らず、自分

なりに子どもたちと親しみをもった態度で接していることが推察できる。

26 子どもを真摯に受け止め、公平で受容的な態度で接することができるようになった

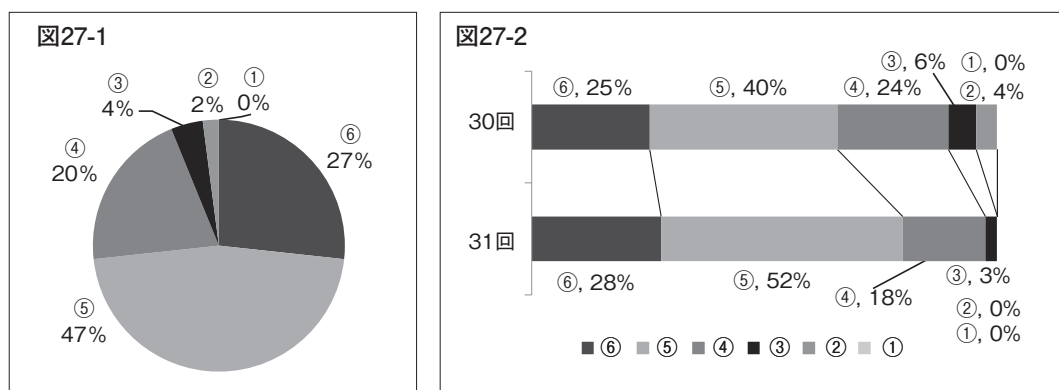


26の「子どもを真摯に受け止め、公平で受容的な態度で接することができる。」という設問に、⑥非常に当てはまる（29%）、⑤当てはまる（37%）、④やや当てはまる（27%）と回答があり、全体に占める割合は93%であった〔図26-1〕。

また、図26-2より、30回、31回ともにほぼ同じ傾向が見られることから、多くの学生たちはミュージカル制作および上演にいたるまでの過程において、子ども係に限らず、自分なりに子どもの声に対して公平で受容的な態度で接することができるようになったことが推察できる。

また、30回と31回のデータを比較してみると、子どもとの関わりや指導に関する19、20、21、22、23の質問に対して、相対的に30回実施の学生のほうが、「非常に当てはまる」と回答している割合が多い。その背景として、30周年という記念行事ということから、加茂公演だけではなく、新潟公演も実施した年であり、学生たちには時間的な負担をかけた側面があるにもかかわらず、新潟の子ども・加茂の子どもと多くの子どもたちに対して歌や演技の指導を行ってきた経験から、上記のような結果の違いが現れたのではないかと考えられる。

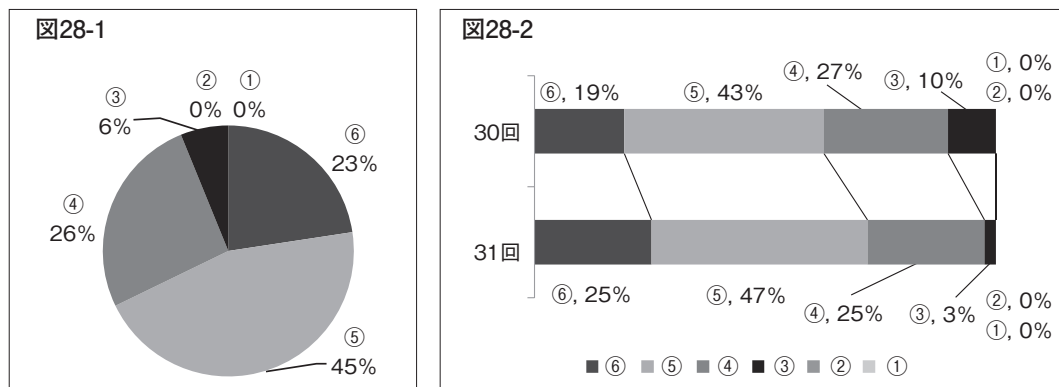
27 挨拶、言葉遣い、服装、他の人への接し方等、社会人としての基本的な事項が身についた



27の「挨拶、言葉遣い、服装、他の人への接し方など、社会人としての基本的な事項が身についている。」という設問に、⑥非常に当てはまる（27%）、⑤当てはまる（47%）、④やや当てはまる（20%）と回答があり、全体に占める割合は94%であった〔図27-1〕。

多くの学生たちは、ミュージカル制作および上演にいたるまでの過程において、様々な社会人としての基本的な事項が身についたと回答しているが、総体的にみてミュージカルの授業後、少しは身についたという感想ではないかと推察する。また、図27-2より、31回の学生のほうがその実感が高いことがわかるが、その理由として、総監督や周りの係のリーダーたちの指導力や人間性による集団の性格が大きいのではないかと考えられる。また、地域の子どもの保護者、外部の制作関係者、一般市民、保育施設職員等との接触から教えられたことも多かったのではないだろうか。

28 自己の課題を認識し、その解決に向けて、学び続ける姿勢を持てるようになった



28の「自己の課題を認識し、その解決に向けて、学び続ける姿勢を持っている。」という設問に、⑥非常に当てはまる（23%）、⑤当てはまる（45%）、④やや当てはまる（26%）

と回答があり、全体に占める割合は94%であった〔図28-1〕。

多くの学生たちはミュージカル制作および上演にいたるまでの過程において、自己の課題を認識し、その解決に向けて、学び続ける姿勢を持てたと回答しているが、ミュージカルの授業後の実感ではないかと推察する。

また、図28-2より、31回の学生の方がその実感が高いことがわかるが、理由として、総監督や周りの係のリーダーたちの指導力や人間性によることが大きいのではないかと考えられる。

以上の結果から、ほとんどすべての学生が制作の過程や上演に向けて、気軽に子どもと挨拶をしたり、話を聴いたりするなど、親しみを持った態度や接し方、子どもの声を真摯に受け止め、公平で受容的な態度で接することができるようになったことが推察できる。

また、ミュージカルの制作を通して地域の子どもの保護者、外部の制作関係者、一般市民、保育施設職員等との接触から教えられたことも多く、そうした経験から社会性が身についたと実感できたのではないだろうか。多くの学生たちはミュージカル制作および上演にいたるまでの過程において、自己の課題を認識し、その解決に向けて、学び続ける姿勢を持てたと回答しているが、ミュージカルの授業後の実感ではないかと推察する。

総括と課題

28項目の調査結果より見えてくることは、80～90%以上の学生がコミュニケーション能力、協調性、問題解決能力、自主性、責任感、および保育者として必要な資質能力として定めた到達目標の中の「態度」、「技能」の分野において、ミュージカル制作・上演に至る過程でおおむね力がついたと実感していることがわかった。

授業担当者として、表現活動指導法の到達目標に対して、また、保育・教職実践演習で設定した保育者として必要な資質能力として定めた到達目標に対して、もっと低い数値や批判的な数値が出るのではないかと考えていた。なぜならば、授業の中で、できればやりたくないという学生や、やる気を感じられないそぶりを見せる学生の姿なども垣間見ていたからである。しかし、授業が終わってみると圧倒的に多くの学生たちが、何らかの達成感を少なからず感じていることが読み取れる。

また、数値的には少ない否定的な意見の内容を詳しく分析する必要性も感じている。例えば、12の「演じる中で自分の特技（得意分野）を活かすことができた」という設問に対して19%の学生が自分の特技を活かしたという実感を持っていないことがわかった。この理由として、全員参加型の授業に対して、表現することがもともと得意ではない学生が、最初からある程度含まれることや、オーディションによって自分のやりたくない役柄に振

り分けられたというマイナスのイメージを持つ学生などが少なからず含まれていることが原因であると思われる。

また、30回と31回の大きな違いは、新潟市と加茂市の2会場で行った公演条件と加茂公演だけを行った条件とで若干の違いが見られた。特に子どもとのふれあいを通して獲得した達成度に関しては、30回の学生がやりがいを多く感じている傾向が見られた。おそらく、それぞれの練習会場で質の違う多様な子ども達に歌や演技を教えなければならない状況に対して何とか対応しながら上演に結びつけたという達成感があったことによるのではないだろうか。

しかし、自主性、責任感、協調性、コミュニケーション能力、問題解決能力などの到達度は31回の学生の方が高い数値となっている。その理由として、その学年が持つ雰囲気や、総監督の力量、また回りを支えるスタッフの協調性などが総合的に加味されて、表われた結果ではないだろうか。

また、舞台上演を31回積み重ねてきたことにより、学生たちは前年の先輩たちの行動を直接見てきた経験や、かつてのミュージカルのDVDによる記録を見ることで、脚本制作の段階から、学生主体の活動が徐々に可能となってきた。これらも学生の自主性や協調性などにプラスに働きかける要素となっているように思われる。

また、あいさつ、言葉遣い、服装、他者との接し方等、社会人としての基本的な態度は、ミュージカルの制作を通して地域の子どもの保護者、外部の制作関係者、一般市民、保育施設職員等との接触から意識化され、時には教えられたことも多く、そうした経験から社会性が身についたと実感できたのではないだろうか。

保育者養成の観点から、引き続き表現活動指導法の授業のあり方を検証していきたいと考えている。例えば、係活動においてリーダーとしての役割をもった学生や、一人役等、少人数でのキャストを演じた学生とグループ単位で演じた学生との意識の比較が挙げられる。

今回実施した28項目の回答と自由記述及び表現活動指導法の課題レポート内容を分析し、授業の方向性、行事としてのあり方等を今後も探ってきたい。

参考文献

- ・文部省教育職員養成審議会「平成8年文部大臣諮問に対する教育職員養成審議会の第1次答申」(1997)
- ・新潟中央短期大学「新潟中央短期大学自己点検・評価報告書平成10年～15年度」(2005)
- ・新潟中央短期大学「平成25年度第三者評価 自己点検・評価報告書」(2013)
- ・寺川悦男「中短ミュージカル30周年史」暁星論叢第66号(2016)